

〈論文〉

決まって〈仮定する〉意となる「とする」の「する」など

——野矢茂樹氏著『哲学の謎』の用例を借りて——

中村 幸弘

まえがき

国語には改めて学ばなくても、いつか理解できているかに思えてしまっている単語がある。そのうちの一語は、動詞「する」である。多様な用法があるうち、この用法については、どの辞典も語義ブランチの一つとして立項してくれてあって広く認識されていると思っていたが、必ずしもそうではなかった。そこで、

この「する」は〈仮定する〉だと言うと、そんなことはわかっていると何度か言われたこともある。遠い昔のことである。ただ、十年ほど前か、その「する」を大量に用いた新書に出会って、そういうことも取り上げていいかなと思うに至ったのである。二人の哲学青年ふうの若者が話し合っていて、頻りにこの「する」を用いているのである。実は、どうも、一人の人も

う一人の自分と気さくな議論をしているのである。話し言葉ながら、どんどん読んでしまつて、途中でまた引き返して、同じ箇所を二度読み三度読みした一冊である。

一 「Hyphal」について認識のしかた

この意となる「する」は、決まって格助詞「と」に続いているのである。「と」に続いている「する」はさらに幾つかに分類できるが、ここに引く一群はとりわけてその担う意が顕著で、〈假定する〉以外には言い換えられない。このように動詞に決まって上接する格助詞ということで、筆者には忘れられない記憶がある。それは国語科ではなく、教務か何かの出張だったか、文部省国語課長の白石大二氏の指導講演だった。横書き文書の取り扱いで、何か質問でもしたのであるか、県の指導主事などの詳細な説明時間なのに一人呼ばれて、「先生は、憲法は好きですか。」と訊かれて、公務用ではない名刺をいただいた。憲法の表現に対する疑問などないかというのである。爾来ご交誼いただいて、後年は、ご著作の新刊紹介などさせていただ

たりしたこともあった。「動詞の格支配」というと、先生が思い出されてきてしまうのである。

筆者には、「背く」用語考―特に上接格助詞「を」に―の問題―（「國學院高等学校紀要」第十輯・昭和四十三年）なる小論がある。「世を背く」（出家する）から「親に背く」「師に背く」へと移っていく用例を拾い上げたにすぎないものだが、そんなものを詳細にお読みくださつて、「格支配」という術語を使ったほうがよい。」というご注意を下さつた。

確かに、ちゃんとした研究者の論文には、格支配という術語を用いて、この「背く」について中世から近世にかけての資料で論じている論考があつた。数年後のことだ。さらに、類似的性格の動詞を取り上げる方も何人かいたように思う。身近にいる方としては、岩下裕一氏にもそういうご論考があつたらうか。

井上宗雄氏との共編になつている『ベネッセ古語辞典』（一九八八年初版）にはその事典部に「動詞の格支配」として掲載してある。その「背く」のヲ格から二格へを述べた後、「恐る」についても引いてある。編集部が準備した原案リストにはその「格支配」は載つ

ていなくて、追加をお願いし、自身で執筆した。なおまた、『相関図45』にも取り立ててあるようだ。

その白石先生からお教えいただいた直後から、そう呼んで取り扱うのがよいのかどうかも考えずに、とにかく、その動詞に上接する格助詞と結びつけて呼ぶようになつてしまった。素養のない話である。いつか、「とする」「にする」と呼ぶようになっていたのである。教室でも「とする」「にする」と呼んでいた。

二 憲法の「とする」と天気予報の「とする」など

長く恐らく七版ぐらいから十版まで、編集委員として協力させていただいたのが、『旺文社国語辞典』（一九六〇年初版、十版は二〇〇五年）である。角川の『角川国語辞典新版』（一九六九年）の編集協力を一緒にさせていただいた青木一男氏と一緒にそちらにもご縁をいただくことになった。ただ、各品詞ごとに伝統ある体裁が整っていて、その範囲内での用例発掘や解説執筆に取り組むということで協力させていただく限界があった。この間に、小学館『日本国語大辞典』（一九七二～七六年初版）・同『古語大辞典』（一九八三年）・

『角川古語辞典』・『学研国語大辞典』（一九八八年）・『学研古語辞典』のお手伝いもさせていただいていたようである。ポケット版国語辞典だけでも十数点、店頭にあった時代である。なかでただ一点、北原保雄氏の大修館『明鏡国語辞典』（二〇〇二年初版）がその〈仮定する〉を語義として採用していたのである。

あれは、もう二〇〇〇年を越えていたと思うが、筆者は還暦近い年齢で、入試関係の責任者を言い付かつて勤務していた。専任になるのが遅かったし、教育現場に長くいたということで、十二年も続けてさせられた。朝日新聞の「ひと」欄が取り上げてくれたので、また伸びてしまった。一方、福武書店、いやベネッセ・コーポレーションと当然なっていたが、そのベネッセから国語辞典編集を言い付けられてもいた。引き受けた直後、勤務先大学では教務部長になっていた。その部長室でこっそりベネッセの原稿チェックをしていた日がい思い出される。学部長会議や教授会の間の僅かな隙間時間もそのチェックの連続だった。

ここで、その『ベネッセ表現読解国語辞典』（二〇〇三年初版）の「する」の取り扱いを見ていただきたい

い。「する」のブランチ⑬である。『…とすれば』「…とする」と「…としたら」の形とある。他にも、⑬に『…とすれば』「…にしては」「…としては」「…としても」「…としての」などの形とある。この項目の執筆は、筆者の側にはその人材がなく、沖森卓也氏側のどなたかのご執筆である。筆者は、ただ、「とする」として取り扱ってくれるよう編集担当社員にお願いしただけである。

平成の最後の年の秋十月も十五日、かねてから社長におもしろいものと言われていて『先生のための…する』という動詞のQ & A 一〇三（二〇一八年、右文書院）を刊行した。その『先生のための…』は、三武義彦社長が筆者の知らないうちに付けてしまったものである。『先生のための古典文法Q & A 一〇〇』（一九九三年、右文書院）や『現代人のための祝詞』（二〇〇〇年、右文書院）が幾らか売り上げとして動いているのに倣って勝手に付けてしまったものである。最近の学校の先生方は本をお読みにならないようなので、もっと幅広い方々を読者に意識していたのだったが、残念だ。

さて、ここでは、「とする」「にする」の姿勢で問いかけ、答えている。例えば、「Q⁵³ 日本国憲法が「AをBとする。」型だけなのは、なぜか。」とか、Q⁵⁴「…津波の心配はないと、している。」は、どう解せるか。」などと問いかけている。「とする」の「する」について問うた、このQ⁵³、Q⁵⁴の二話は、憲法の「する」と天気予報の「する」と言って楽しんでもらいたいと思っている。どの話も、見開き2ページで纏めてある。

では、ここに取り上げる〈仮定する〉となる「とする」の「する」はどこにあるのかとお待ちかねであろうと思うが、顕著に見られるわけではないので、Q²⁵のなかに含めてしまった。Q²⁶一文を引用した「とする」は、仮定のほかに何を表すか。」に収めてある。そこには、「aはbより大きい」とする。」が引いてある。そこには、どうしてこういう言い方が行われるようになったかも書いてある。この表現、一般には、そう多くない。しかも、はつきりそう感じ取れるのは、その「とする。」で言い切られている場合である。数学の授業である

三 野矢茂樹氏の『哲学の謎』という書物

小稿の副題にも掲げ、続いて、まえがきにも引いたこの書物については、特にその体裁について詳細に紹介させていただいた。その一冊は、見返しの次の扉から始めてあとがきまで数えて二〇四ページの新書本である。自分の死後も世界は続くのかとか、「時間が流れる」のは本当なのかなどを哲学している。

この著者との出会いは飽くまでも筆者独りの思い込みでしかなく、たまたま出会った短期大学学生の編入学先の教授でいらっしゃる、ということではない。その後、この著者の書籍を七・八冊読ませていただくことになった。その一冊が、この『哲学の謎』（一九九六年、講談社現代新書）である。通勤に一時三十分、四十分を要していたので、車中の友人としてこの一冊は、半年近く鞆の中にあつた。遅読の筆者にはその各一章がちょうど片道に手頃で、その半年ほどのうちに二往復していた。そして、〈仮定する〉意の「する」の多さに、当然気づかされていた。

今回、改めてこの本を自宅で読んだ。自宅といっても、施設の自室で、車中でなく、自分ともう一人の自

分と対話しながら通読することになった。〈仮定する〉意の「する」を検出するための通読である。右眼の瞼が下垂して、右手の指でその瞼を吊り上げての読書である。該当箇所を発見してのカード転記も、辛うじて二十センチあるかないかの机の端で、入居の際買い求めた安い北欧家具である。平生は既に亡妻となつた彼女と娘とそちら側の孫二人との最後の家族写真を貼り合わせた額縁に占められているが、彼らには暫く移動してもらつての作業である。

やはり、彼のことを書いておこう。その学生は同じ市内の栃木県立学悠館高等学校から入学してきてくれた、間違いなく学業成績優秀な優等生だった。二年次生となつて早速に、週一時間、個人的な対話を希望された。確か『徒然草』のなかの兼好の表現を契機としての二人での雑談だった。筆者は、このお陰で、拙稿『徒然草』コソ係結文の構造と兼好の認識の論理（『國學院雑誌』第一二〇巻第九号／令和元年九月十五日）を執筆することも出来た。その彼の編入大学先の、彼がご指導をいただきたいと言っていた方が野矢茂樹先生だったのである。その彼は、その後、どうしている

であろうか。小稿執筆の契機は、そこにこそあったのである。

四 〈仮定する〉意の「する」であることが最もよく感じ取れる終止形の用例

その「する」が〈仮定する〉意となっているとはつきり感じ取れるのは、そこで言い切られた終止形の場合である。

(1) 地球上からいっさいの動物が絶滅したとするね。

(1 意識・実在・他者／12・4)

(2) あのさ、あまり考えたくない想像だけど、世界に残った生物がぼくと君だけになったとする。(同／15・4)

(3) 例えば、そうした「外面的なものだけ」をすべて備えたロボットを作ったとするよね。(同／27・12)

(4) 先週甘いことを言われて、今日になって騙されたことに気づいたとする。(3 時の流れ／71・2)

(5) そうだな、ある種の精神障害で、言葉遣いがおかし

くなってくる症状があったとする。(4 私的体験／90・4)

(6) 君の視野がある状態になって、君はそれを「アツカ」と呼びたくなるとする。(同／91・1)

(7) あくびをしたとたんにくしゃみが出たとする。(6 規範の生成／120・9)

(8) 例えば、棒が一本あるとするじゃない。(7 意味の在りか／152・7)

(9) 例えば、枯葉の動きは行為だという合意が形成されたととする。(8 行為と意志／168・16)

(10) あのさ、行為かそうじゃないかをわれわれの側の違いとして捉えようってことだけど、さっきの未知の惑星で、ぼくらに向かって宇宙人みたいのが腕みたくのを上げたみたいな動きをしたとするね。(同／169・7)

(11) 枯葉が落ちたとする。(9 自由／196・12)

(12) 自然現象として、枯葉はあのように落ちるしかなかったとする。(同／196・14)

右十二例の「とする」の「する」が決定的に〈仮定

する」意となる用例である。その十二例は、いずれも少なくとも一文をその格助詞「と」が引用している。

さて、(1)・(10)の「する」は下に間投助詞「ね」を付け、(3)の「する」は終助詞とも間投助詞とも見られる「よ」と間投助詞の「ね」を付けている。間投助詞は文節すべてに付くので、上接する「する」は、問題なく終止形である。いま一例、(8)の「する」は下に「じゃない」が続いている。この「じゃない」がイントネーションで発音されていると見てよいであろうか。そうであるとする、この「じゃない」は「じゃないか」の意となり、この「じゃない」は「ではない」の変化した語形と見られる。その「で」は断定の助動詞「だ」の連用形であり、助詞「は」を挟んで、「ない」は補助形容詞の連体形ということになるか。この(8)の「する」だけが連体形ということになるが、その意味するところに変わりはない。以上、下接する語や語句がその「する」の理解に影響しないことを確認した。

ここで、気づいていたが触れる機会を待っていた陳述副詞「仮に」が、必須でないを通り越して、まったく必要ない存在であることを確認した。その「仮に」

の言い換えとも見られる副詞「たとえ」の、或いは前身かも知れない「例えば」が、(3)・(8)・(9)の三用例に見られる。(3)・(8)は、間投助詞ということになるか、「さ」を伴っている。

残っている問題として、その引用の格助詞「と」が受ける一文を観察したとき、(6)・(8)が、完了の助動詞というか過去の助動詞というか、なくともいい助動詞「た」があるが、その「た」を伴っていない。「呼びたくなつた」とする「や」あつたとする「ではないのである」ところで、筆者が認識しているところでは、この「た」を伴わないほうが古いように感じている。遠い昔、宮地幸一氏であつたらうか、確認とか確かめとか呼んでおられた「た」があるが、⁽⁴⁾こういうところの「た」であつたらうか。それはともかく、(6)・(8)のほうが古い形で、他の用例は近年の表現と見たいように思う。これは調査すれば、直ぐわかることである。あの数学の先生の授業のそれは、「補助線を引くとする。」だった。いま、私が言うと、ついうつかり「補助線を引いたとする。」と言つてしまいそうである。

ここで一つ、厄介な用例に出会ってしまったの

である。

?

○豚が汚れた寢床に寝ていると、する論理的根拠はな
いからね。(15 経験と知 / 104・3)

これは、完全にというのも変な言い方になるが、とにかく、連体形の用例なのである。その「する」を〈假定する〉意と読めば読めなくてもない。ここは、珍しく長い発言のところであって、自身の無茶な論法の言い訳をしているところのように思える。すると、その「とする」は、「と言える」であり、いつそう現代ふうにな言えば、「と主張できる」であるようにも思えてくる。いかがであろうか。

五 他の仮定の表現と融合して〈假定する〉意となる「とする」の「する」の「し」「すれ」形

本章で取り上げる「とする」の「する」は、併せて用いられる仮定の意を担う助詞や助動詞の力を借りて融合した結果として〈假定する〉意となる「とする」

の「する」の「し」「する」「すれ」形である。長い読解指導のなかで感得した理解の一つで、動詞と助詞と、動詞と助動詞とに、それぞれ仮定の機能を認めると、その二単語部分を仮定の強調と見てしまう生徒・学生がいて、止むなく、融合してというように説明したのである。もつとよい説明があるかも知れない。早速、その用例を紹介する。順序については、説明が容易で理解しやすい組み合わせから取り上げていくこととする。用例は、全体のページ数を考えて、各一例ずつとする。

(a) 「としたら、」の「し」「する」の連用形

○「ただ、もし自分の内なる意識から出発したと、したら、もうそこからどこへも出ていけなくなつてしまふ。(1 意識・実在・他者 / 31・7)

右例が、まず一文を格助詞「と」が受けていることを確認する。その「としたら、」の「たら」は、上接する動詞「する」の連用形「し」と融合して、さらに波線部「もし」に呼応して、順接假定条件表現を構成

していることを理解する。ここにある動詞「する」の連用形「し」は或いは無概念動詞であったかも知れないが、この段階で〈假定する〉意となっている。なお、その文末の「出ていけなくなつて」し「まう」の下には、表出されていなくても、推量表現「だろう」が読み取られて、上の順接假定条件表現に応じている。

(b) 「とすれば、」の「すれ」「する」の假定形

○例えば、机の上に本が見えているとすれば、実在の世界でも机の上に本があるんだらうってね。(1意識・実在・他者／21・1)

右例が、まず一文を格助詞「と」で受けていることを確認する。続いて、その「とすれば、」の接続助詞「ば」は、上接する動詞「する」の假定形「すれ」と融合して、さらに陳述副詞「例えば、」に呼応して、順接假定条件表現を構成していることを理解する。ここに見る動詞「する」の假定形「すれ」は或いは無概念動詞であったかも知れないが、この段階で〈假定する〉意となっている。なお、その文末の「あるんだらうって

ね。」には推量表現「だろう」が存在していて、上の順接假定条件表現に応じている。「だろう」の上の「ん」は助詞「の」が転じたものであり、「だろう」の下「つてね」は「とね」が転じたもので、「と」は引用の格助詞、「ね」は間投助詞の終助詞的用法である。

(c) 「としても、」の「し」「する」の連用形

○たとえ意識だけが残されたとしても、ひとつだけじゃない。(1意識・実在・他者／22・8)

右例の引用の格助詞「と」がまず一文を受けていることを確認する。続いて、その「としても、」の接続助詞「ても」が、上接する動詞「する」の連用形「し」と融合して、さらに副詞「たとえ」と呼応して、逆接假定条件表現を構成していることを理解する。陳述副詞「たとえ」は、「仮に」にも言い換えられるが、その「たとえ」も「仮に」も、必須ではない。とにかく、ここに見る動詞「する」の連用形「し」は或いは無概念動詞であったかも知れないが、この段階で〈假定する〉意となっている。なお、その文末の「(ひとつだ

けじゃ) ない。「ない」の下には、表出されていなくても、推量表現「だろう」が読み取れて、上の逆接仮定条件表現に依拠している。

(d) 「とすると」、「する」

○同じだとすると、どうなるのかな。(6規範の生成/124・4)

右例の引用の格助詞「と」がまず一文を受けていることを確認する。「同じだ」は形容動詞で一語であるが、同時に一文である。「同じだ」はそれで一語の形容動詞であるが、連体形が語幹「同じ」だけで用いられるところから、この単語には戸惑う人が多い。次に、「すると」、「と」が接続助詞「と」であることを十分に確認して、上接する動詞「する」の終止形の「する」と融合して、順接仮定条件表現を構成していることを理解することである。同じ「すると」、「でも、順接恒常条件表現を構成している場合もあるので、留意することが必要である。仮定か恒常かは、後続する表現が未来に向けて推量しているか、一定して変わらな

い状態を述べているかによって区別されよう。さらに、「すると」、「と」については、逆接仮定条件表現を構成する場合もあり、その場合も、後続する表現によって判断される。この著書のなかの用例としては、順接仮定条件表現に限られるものと読み取れた。本用例で、その後続する「どうなるのかな」は表出されていなくても、「どうなるの「だろう」かな」というように、推量表現「だろう」が内包されているものと読み取れる。「どうなる」の「どう」は今後の状況が不明であることを表す副詞で、動詞「なる」がこれを受けて変化していく経過の時間の動きを表している。次の助詞の「の」は用いる場合と用いない場合とがあつて、用いているこの場合は、続く「かな」との関係を実際立たせているものと感じ取れる。その「の」の助詞の種類名等については、現在の筆者としては判断を控えておきたい。「かな」は、疑問の意の終助詞「か」に感嘆性の終助詞「な」が付いて一語化したものである。述べた意見についてそれでよいのか躊躇う気持ちと相手に尋ねる気持ちとを併せもっている連語助詞である。自問性對他問性とを併せもっているといってもよい。

(e) 「としよう。」の「し」「する」の未然形)

○犬一般ということが理解できていない子供がいた
としよう。(7意味の在りか／138・14)

右の表現形式「としよう。」ともなると、その用例数は限られてくるが、一定の読解感覚が成長していれば、直ちにこの「し」が〈假定し〉を意味していると読み取れるであろう。「よう」は、勧誘の助動詞である。

(f) 「として、」の「し」「する」の連用形)

○これが見本だとして、何の見本だと思う？ (6規範の生成／125・9)

右用例は、多くの読者を悩ませる用例である。この本文に即していえば、聞き手のもう一人の自分に向けての疑問文のなかの用例である。以下の用例と比較してみてほしい。

X1つまり、あの川遊びは昨日思い出したときは二日

前のことだったけれど、今日は三日前のこととして思い出される、そういうことだ。(3時の流れ／68・16)

X2三日前、その川についたばかりのときには、川はこれからすぐに足をひたすことのできるものと現われていた。(同／72・13)

X3公共言語の場合には、周りの大勢がある人の言葉遣いをまがいと訂正しようということだろうね。(4私的体験／91・10)

もう気づいたことと思う。X印1・2・3の三例は、名詞句や名詞を格助詞「と」が受けている。その動詞「する」の連用形「し」は、〈位置づけ〉ぐらいに相当するが、前後の助詞「と」と「て」とを一体化させて連語化している。資格の格助詞となっているといってもよい連語格助詞なのである。では、○印の(f)の用例の、その「し」はどうであろうか。引用の格助詞「と」が「これが見本だ」という一文を受けている。その場合の動詞「し」は、間違いなく〈假定し〉と読み取れるのである。

本章に該当する用例は、大量に存在する。概して(a)・(b)・(c)の類例が多く、殊に逆接仮定条件表現を構成する接続助詞は「ても」に限られるといつてもよいので、(c)の「としても」がとりわけて多かったように思う。一方、「とする」の「する」が完了とか過去とかの助動詞「た」に連なる「とした。」に出会うことはなかった。出会えなかった。文法的には成り立つても、人間の営みとしては極めて稀な行動ということになるであろう。見落しかなと思いつつ、そういう表現に出会えることを楽しみにしている。

さて、ここに前章で取り上げるか、本章に回そうか、悩んでいた用例がある。「とする」の「する」が、完全に連体形になっていたのである。完全に連体形というのも変な言い方だが、とにかく、「とする」の「する」が連体修飾語を構成していたのである。

○豚が汚れた寢床に寝ていたと、する論理的な根拠がなかったからね。(5 経験と知／104・3)

確かに、一文「豚が汚れた寢床に寝ている」を格助

詞「と」が受けている。ただ、その前には、「例えば、ある動物が豚だということからその寢床が汚れていると判断する」のはたんなる連想や、正当な推論ではない。」とあったのである。この「とする」の「する」は、その「判断する」を受けて、単に「する」といったのであろう。英語の do に倣ったのであろうか。

六 「する」でもいえるところを、意識してか、「み
なす」と表現した著者

ここで、脱線するように見えるが、そうではない。「とする」の「する」が〈仮定する〉意となるのと最も近いところにある「する」が〈みなす〉意となる「する」だからである。気づくともなく気づいてから〈仮定する〉意となる「する」が気になり続けていたが、その後、『明鏡国語辞典』に「…と仮定する。」とあってくれた。その「と」がどういう引用かということと併せて周辺に質問してみようと思ったが、そのままになっていた。『明鏡国語辞典』では、その〈仮定する〉意を⑦として、①に「…と見なす。」を挙げていた。これも感じていたところである。

さて、〈みなす〉意となる「する」は、もともと多くはない。なかなか出会えなかったので、そういう意となる「する」が必要となる思索の場面には出会えていないのかと思っていた。ところが、「みなす」そのものが採用されていて、後半のある段階からは、その「みなす」が頻用されていたのである。むしろ、一般には、そこにも「する」を用いるところに「みなす」とはつきり語っていたのである。以下、その用例を列挙する。どの章に用いられているのかも、確認してほしい。

(ア) いま君は、われわれがいまどうやって記憶の正誤を確認かめ、どうやって妄想を妄想とみなすのかを調べるべきだと言ったね。(2記憶と過去／42・9)

(イ) そのとき、ロビンソンはドビンソンの解釈を誤解として修正できるけど、ドビンソンはロビンソンの解釈を誤解とみなすことはできない。(6規範の生成／129・13)

(ウ) ある規範に対する解釈が大人と子供で異なってしまうとき、それはどちらかが誤解とみなされる

しかない。(同／130・6)

(エ) 天才と言いたくなるけど、知能障害とみなされる。(同／130・15)

(オ) いずれにせよ、子供がその言葉になんらかの働きを話して口に行っている以上、それはたんなる単語の発声ではなく、一語文の発話とみなさねばならない。

(7意味の在りか／150・3)

(カ) 薪の人はその棒と他の短い木の枝を同種のものトとみなすだろうし、杖の人はその棒と手頃な竹竿とを同種とみなす。(同／152・14)

(キ) 薪の人はその棒と他の短い木の枝を同種のものトとみなすだろうし、杖の人はその棒と手頃な竹竿とを同種とみなす。(同／152・14)

(ク) それを短い木の枝とではなく、手頃な竹竿と同種のものトとみなすということだ。(同／154・3)

(ケ) 確かに、そうした意味懐胎を言語的な現象トとみなすならば、それは音声言語や文字言語以前に生じる現象ということになりそうだ。(同／154・7)

(コ) 人間もまた自然の存在にすぎないとみなすのであれば、人間のふるまいはもはや行為ではない。(8

行為と意志／159・8)

(サ)もし神経生理学的に説明してそれで事足りるとされるのであれば、それはむしろ行為ではないもの

とみなされるだろう。(同／166・2)

(シ)じゃあどうして枯葉の動きを行為でないものと

みなすんだろう。(同／166・15)

(ス)枯葉の動きを行為とみなすのはあんまりだという気もするけど、でも、かつては雷は雷神の為す行為だったでしょう。(同／167・3)

(セ)いや、枯葉やミジンコの動きを行為とみなす文化があつてもよさそうだ。(同／167・5)

(ソ)いや、それはすでに相手の動きを行為とみなした問いではないかな。(同／170・7)

(タ)人間を物理学の記述に従うような物とみなすことと、そこから自由でありうるものとみなすこととは、

観点が違うんじゃないかな。(9自由／184・6)

(チ)人間を物理学の記述に従うような物とことと、そこから自由でありうるものとみなすこととは、観点が違うんじゃないかな。(同／184・6)

都合、その「みなす」は十七例もあったのだが、こ

こで最も強く受け止めてほしいのは、その十七例ともに、「する」に差し換えることができるということである。もちろん、その活用形とか、語形にに応じて、(ア)・(イ)・(カ)・(キ)・(ク)・(ケ)・(コ)・(シ)・(ス)・(セ)・(タ)・(チ)の「みなす」は「する」に、(ウ)・(エ)・(オ)・(カ)の「みなす」は「さ」に、(イ)の「みなし」は「し」に、それぞれ言い換えることができる。つまり、この「みなす」という動詞のところは、「する」で表現できるのである。そして、筆者の感覚だけで言っても、そこは「する」の適切な活用形で表現するほうが一般的である。この表現は、著者が意識して、それを敢えて「みなす」の適切な活用形にして用いているのではないか、と思えてくるのである。

ただ、それら各用例の引用の格助詞を見たとき、一文を引用しているのは(コ)だけであり、他はすべて、名詞や名詞句を受けている。そして、この表現形式の留意するところは、多くが特定したあるモノを近似した別のあるモノとして代行させる関係が背景に存在するということである。しかも、そのモノは、具象的な「物」

だけでなく抽象的な「もの」についても表現できるようである。用例の(夕)と(チ)とから気づかされた。そうはいえるが、この著者が取り上げているのは、抽象的な「もの」である。

用例の(サ)には、「…それで事足りるとされるのであれば、」とあつて、また別の「とする」の「する」であるが、ここでは、ここにもまた「とする」の「する」があつたと言うに止めておく。それほどに「とする」の「する」が多いのである。

七 格関係だけを標識に酷使されつづける「する」たち

〈仮定する〉意となつてしまう「する」は、まず、その直上に引用の格助詞が必須で、その引用の格助詞の上には仮定する内容が一文として配されていなければならない。その〈仮定する〉意を担うことになつた「する」は、仮定条件表現などを構成する助詞や助動詞が要求する活用形に変化して、その「し」「する」「すれ」などがそれら助詞・助動詞と融合して〈仮定する〉意の仮定条件表現を構成するが、単独の「する」だけで

言い切られたり、終助詞「ね」などを添えたりした場合、いつそうはつきり〈仮定する〉意を読み取らせてくれるし、読み取らなければならない。条件表現などの助詞・助動詞を伴っている場合の「し」「する」「すれ」のほうが、むしろその〈仮定する〉意が読み取りにくいようにも感じられる。〈仮定する〉意となる「する」の素朴な読後の感想である。

「みなす」という動詞を用いるところに「する」という動詞を当て嵌めると特に抵抗感もなく、そのまま通用する表現となる。むしろ、そのほうが一般的だともいえる。多くの人が〈みなす〉意となる「する」を用いている。ただ、その場合、その「する」の直上には引用の格助詞「と」が必須であり、さらにそこには、みなしたい対象となる名詞や名詞句や一文なりが引用されていなければならない。それだけではない。どういう物なりものなりをそうみなしたいのか、そういう物やものが背景になければならない。その物やものがヲ格で示されている場合もあるし、暗に感じ取らせている場合もあるであらう。

筆者が憲法の「する」などと呼んで楽しんできた、

あの「する」は、「AをBとする。」型である。ヲ格とト格とが必須のものである。ヲ格とト格とで絞り込まれると、意味するところが絞り出されるように感じられてくる。この場合の格助詞「と」は、時枝誠記という人の文法では、確か、指定の助動詞の連用形として取り扱っていたろうか。^(注2)その指定という判断、そう感じられてくるが、どうであろうか。

こう考えてくると、動詞「する」は、周囲の表現との関係、特に格助詞の配され方などによって、その都度その都度によって、担う意味が発生してくるように思えるが、どうであろうか。確か、あの、山田孝雄という学者は、この動詞「する」、その古典語形「す」を指してだが、その大著『日本文法論』のなかで形式動詞と呼んでいる。^(注3)筆者は教場で無概念動詞と呼んでいた。形だけで意味がなく、活用機能だけの動詞なのだ。

その「する」は、このように格関係に拘束されて、そのなかで発生してくる概念を担うことになるのである。その格関係は、ト格・ニ格・ヲ格などもっと多量な縛りがあった、そのなかから概念が絞り出されるよ

うに生み出されてくるのである。だから、多様な意味ともなる。その格関係の縛りがなくなると、「する」の意味は消えてしまう。

この二〇四ページの一冊のなかに、予想もしていなかった複合動詞といってもよい「する」があった。歴史ある格関係の縛りを受けて辛うじて生き残っていた「する」である。

○人間の眼には連綿と続いてきたこの世界だけがある。五分前世界創造仮説は、世界創造を目撃し、創造以前の虚空をも目撃しうるかのような超越的視点をもつてしなければ想像しえないものにはかならない。(2記憶と過去／44・6)

著者はどういう意識でこの表現をしているのであろうか。筆者は、「もつてする」という複合動詞として用いているものと感じる。意味するところは、〈用いて目撃する〉である。そうでなければ、「もつて」を「を」に続けて複合動詞「をもつて」と動詞「する」の連用形「し」とである。「し」は当然〈目撃し〉である。

とにかく、ここは、やはり、漢文の「以つてす」を思い出してほしい。

この表現は、もともと漢文訓読に発するものである。
 「^{スルニツテス}以^レ□□」を起源とするものである。『先生の
 ための』する^レという動詞のQ&A一〇三のQ13に
 詳細説明してある。ただここでは、その「もつてする」
 だけを生かして、この文脈に相応しく用いているので
 ある。この訓読語「もつてす」も、あらかじめ「〇〇
 するに」を必須とする格関係に拘束された古典語動詞
 「す」だったのである。

八 〈語義〉なのかへ…の意を担っている〈なか

決まって〈假定する〉意となるということは、「仮
 定する」という語義ということなのだろうか。それと
 も、「假定する」という意を担っているということな
 のだろうか。まえがきに述べた、あの、この「する」
 は〈假定する〉だと言った時、どんな意を担っている
 かと聞いたように思う。『明鏡国語辞典』は、語義の
 欄に「仮定の内容を受けて、ひとまずそう考えておく
 …と假定する。」とあるが、〈假定する〉という意を担っ

ている。と解してよいのであろうか。

「する」が「みなす」となっている場合についても、
 それは、どう呼んで取り扱っていったらよいのであろ
 うか。筆者は、この場合についても「みなす」意を担っ
 て用いられている、と言ってきたようである。

いま、改めて、野矢茂樹氏著『哲学の森』の用例を
 借りて観察してきた一文を格助詞「と」で承けて応答
 する動詞「する」については、「假定する」意を担っ
 ていた、と言いたいと思っている。その「…とする」
 の「…」が語句に相当したとき、その「する」が「み
 なす」意を担っていることもあるからである。

付 「假定」「假定する」考」を期待する

せっかく哲学者の文章を読ませていただいたのだから、
 それらしいことを考えたくなった。〈假定する〉
 意となる「する」について、小稿はその事情を追跡し
 てみた。そして、「假定する」という思惟を試みるよ
 うになった時代や情況への関心が高まった。漠然とで
 あるが、西欧から伝来した数学や論理学が齎したもの

と認識している。英文法という假定法などの「假定」がいつどうして造語されたかなども知りたくなかった。国文法でも、未然形＋「ば」で順接假定条件を表すなどという、その「假定」は恐らく英文法の術語を借りたものであったろう。

その国文法の順接假定条件表現の用例は、上代から存在する。上代人も假定する思惟行為をしていると直ちに思ったが、未然形＋「ば」が假定する行為であると見るのは現代人の解釈である。中古・中世や近世の擬古文にも未然形＋「ば」は存在して、すべて順接假定条件表現と解されている。しかし、まだ、「假定」「假定する」という語彙は存在しない。『日本国語大辞典 第二版』（二〇〇〇―二年、小学館）によると、末広鉄腸の用いた用例が初出で、それまでの国語のなかにそれに相当する語彙は存在しないようだ。すると、国文学者の考えどおり、未然形＋「ば」で假定条件を示し、「假定する」思惟行為を行っていた——そのすべてが論理的な假定表現とは限らなかったようだが、とにかく假定表現と呼んで取り扱っている表現は大量に存在する——としても、この国の人たちは、その思

惟行為を言語化することができていなかったことになる。たまたま一人の個人の思惟行為だったら、言語化できない思惟行為はたくさんあると思うが、こんなに多くの人が長い期間にわたって行っていた思惟行為ではあっても、瞬時の思惟行為なので、言語化されることがなかったのであろう。論理的思索に先立って、その一瞬ともいえる短い思惟行為を言語化した言語は、何語だったのだろうか。

「假定」「假定する」は、この国の造語であろうか。とにかく、古代中国からの漢語ではない。西欧語からの翻訳造語であろうが、『哲学字彙』になく、その後の成立のようだ。哲学と国語学との「〈假定〉」「假定する」考」が期待される。

〔注〕

- 1 今泉忠義・宮地幸一共著『現代国語法』（一九五〇年、有精堂）「二 たしかめの表現」一七ページ。
- 2 時枝誠記『日本文法 口語篇』（一九五〇年、岩波書店）「第二章 語論（一）指定の助動詞」一八三ページ。
- 3 山田孝雄『日本文法論』（一九〇八年、宝文館）「第三

章 語の性質 第二用言 四 形式用言 三 形式動詞」三二七ページ。

〔補記〕

オルテガ・イ・ガセット著・佐々木孝訳『大衆の反逆』（岩波文庫、二〇二〇年四月十六日第一刷）に、次の用例を見た。

○一応みなすとすれば、……。〈フランス人のためのプロローグ1／9〉

右の「すれば」の「すれ」は、〈仮定する〉意を担っている。ただ、「みなすとすれば」は「みなせば」と表現しても、〈みなすと仮定するならば〉の意が読み取れる。〈仮定する〉意の「する」には、このような問題もあった。

〔初校の時点で必要を感じた後記〕

令和七年二月二日午後六時半過ぎ、苛立つことが続いて脳梗塞を発症、一時間ほど失神していたが、八時頃、救急ボタンを押したようだが、施設のスタッフが来てくれたのは、翌朝の五時前だった。右眼は一センチほど下

垂し、唇は歪んでいたようだ。右半身が動かない。直ちに入院、十数日の加療で退院したが、一週間後にまた血圧の上が二〇〇を超え、再び入院となった。

六月二十二日（日）、鶴見大学附属中学校高等学校の福島健一先生と、個人的にお話したことはないと思う、國學院大学栃木短期大学の津島昭宏教授とがお見舞いくださった。住民票も移したので拙宅といつてよいこの狭い部屋にで、ただただ恐れ多く、津島教授から、令和六年九月初めの、教授会が認めていない短大募集停止について、の理事会発表の経緯を承った。その頃、野矢茂樹『心という難問』（講談社）に「動詞＋係副助詞＋補助動詞「する」が意外なほどに多くてつい拾い集めていた。それで一遍書いてみたいと思っていた。つい、「退職教員でも書かせていただけますか。」と伺ってしまった。その日のうちに作業を開始し、相応の日時は要したが、それなりに纏めえたようだ。

実はその後、機会あって、某誌編集の日本語学者の査読をいただいた。学術論文でないことは明らかである。エッセイとさせていただいた所以である。現在、この「する」については、以下のような諸研究が存在するとのこ

とである。研究機関としての國學院大學栃木短期大学を去つてしまつた筆者には、その先行研究すら確認できないのである。ご教授いただいた諸論を、ここに揭示させていただきます。

・蓮沼昭子（一九八五）『「ナラ」と「トスレバ」』『日本語研究』56

・藤田保幸（一九九三）「接続詞「すると」「そうすると」「とすると」「と」をめぐって」『詞林』13

・江田すみれ（一九九八）「条件を表す複合辞「とすると」「とすれば」「としたら」の共通性と相連点について」『日本語教育』99

・中山英治（二〇〇〇）「仮定的な事態をさしだす『〜とする』とその周辺」『人間文化学研究集録』32

・岩男考哲（二〇〇七）『「とする」構文についての覚書』『日本語・日本文化』33

自らの不勉強を恥じるとともに、この一遍が本誌を手にする日本語学専攻以外の方々の現代日本語認識のお役に立てたら、幸甚である。（初校日の令和七年十二月八日加筆する。）